

巻頭言

新潟での学術総会開催に寄せて

染矢俊幸 第115回日本精神神経学会学術総会会長
Toshiyuki Someya

2019年6月20～22日、新潟市の朱鷺メッセにおいて、第115回日本精神神経学会学術総会が開催される。新潟での開催は63年ぶり3回目となる。新潟は本学会と縁が深く、1935年の第34回総会は「新潟革命」とも呼ばれ、学会名が「日本神経学会」から「日本精神神経学会」に、機関誌も「神経学雑誌」から「精神神経学雑誌」に改められ、これを機に本学会は日本の精神医学を牽引するプロパーの学会としての旗幟を鮮明にしたと記されている。この時、後に本学会の英文機関誌「Psychiatry and Clinical Neurosciences」となる、本邦初の欧文精神神経学雑誌「Folia Psychiatrica et Neurologica Japonica」も創刊され、本学会が掲げる「学会の国際化」の大きな一歩が踏み出された。また、第34回の盛況ぶりは神経学雑誌第38巻第8号の雑報欄に「本会懇親会は28日夜新潟市内イタリア軒に於いて開催せられ、これまた本会としては稀有の盛会なりき。(中略)来会者一同渾然融和するが如き観あり」と記載されている。第115回学術総会も、参加者が「渾然融和するが如き」盛況となるよう努めたい。

本学術総会のテーマは「—ときをこえてはばだけ—人・こころ・脳をつなぐ精神医学」とした。ときをこえての“とき”は、解き、時、朱鷺を意味し、心や脳の機能・病気を解き明かし、時を超えて、新潟の象徴でもある朱鷺のように未来へ羽ばたいていけ、というメッセージである。われわれは「こころ」に表れる医学的問題に専門家として対応しているが、「こころ」の問題にきちんと対応するためには、それらの現象をよく理解することが大切である。そのためには基盤にある「脳」機能について理解を深める必要があり、たとえその道筋が困難でも、それを乗り越えていかなければならない。一方、還元的理解ではなく総体としての人間、一人ひとりの「人」を主役において「こころ」「脳」をつなぐ精神医学、その人の人生経験や価値観を理解する医学をめざしたいという意図が込められている。

第115回学術総会の準備にあたっては、一般演題の充実

を目標に掲げた。多種多様なテーマを取り扱う、きわめて幅の広い学問という精神医学の特徴からか、一般演題はそれぞれの専門学会で発表される傾向があり、本学会のような親学会で一般演題を発表し、経験や知識をより広く共有しようとする文化が十分醸成されていない。参加者約8,000人という、医学会としてわが国有数の規模にもかかわらず、一般演題は例年300題前後という状況がそれを示している。将来的には2,000題を超える一般演題が寄せられ、さらに充実した学会になることを願うが、昨年の学術総会で「来年は1,000題」を宣言したところ、多くの方々のご協力により今回は1,300題に迫る一般演題登録をいただいた。この場を借りて厚く感謝の意を表したい。

一般演題のカテゴリーとしては、論文でいえば原著論文や症例報告に相当する従来の一般演題に加え、各関連学会やテーマごとに現状や課題を概説する「総説」的な特別枠を新設した。このコーナーに足を運び、多くの専門学会や団体、各大学がどのようなテーマに取り組み、どのような成果をあげているのかを広く学んでほしい。専門研修基幹施設のコーナーでは、各研修プログラムの魅力や問題点を共有するとともに、研修担当者間での意見交換の場、研修医に向けた情報提供の場になることを期待している。

本学会は、精神神経領域を代表する基幹学会として、きわめて重要な役割を担っている。新潟大会が精神医学の学問としての発展に寄与することはもちろん、関連学会や関連団体との連携によって、参加者が専門外の領域についての現状と課題も知ることができるような大会を創ることで、基幹学会学術総会のあり方を考える第一歩としたい。同時に、次世代を担う精神科医の養成、ICDなどの国際活動への対応、社会に貢献できる精神医学や精神科医療の姿を真摯に議論し、それらの道筋を発信する活発な学術総会になれば願っている。会員の皆さまのご参加を心からお願い申し上げたい。